

主 題：私の信条③

聖書箇所：随所

我は天地の造り主、全能の父なる神を信ず。
我はその独り子、我らの主、イエス・キリストを信ず。
主は聖霊によりてやどり、おとめマリヤより生まれ、
ポンテオ・ピラトのもとに苦しみを受け、十字架につけられ、
死にて葬られ、陰府にくだり、三日目に死人の内よりよみがえり、
天にのぼり、全能の父なる神の右に座したまえり。
かしこよりきたりて生ける者と死にたる者とを審きたまわん。
我は聖霊を信ず、聖なる公同の教会、聖徒の交わり、罪のゆるし、
からだのよみがえり、とこしえの命を信ず。 アーメン。

私たちの信仰を見事に表した使徒信条です。さまざまところで気づかされることの一つは、一体自分たちが何を信じているのか、なぜ信じているのかを知らずにいるクリスチャンたちに出会うことが珍しくないことです。あなたは何を信じているのですか？なぜそれが真実だと言えるのですか？と尋ねると、多くの人たちは何となく信じている、聞いたことをただ信じている、だからどのように答えていいのかわからないという答えが返って来る。これは大変悲しいことですよね。では、例えば皆さんにあなたはクリスチャンだと言っておられるけれども、何を信じておられるのですかと問いかけたら、どんなふうにお答えになりますか？まさにそのことを大変見事に表してくれているのがこの使徒信条です。我々ひとりひとりクリスチャンの信仰の告白とすることができます。願わくば皆さんがこの信条に戻るたびに、これが私の信条である、私はこれを信じていると告白できる信仰者に成長できることを願っています。

A. 「父なる神」

まず「我は天地の造り主、全能の父なる神を信ず。」ということで、「父なる神」とはどういうお方かを見てきました。「父なる神」というのは主イエス・キリスト、またイスラエルを、そしてあなたや私を子どもとして愛してくださっているお方であるということを見ました。

1. 「なる神を信ず」

しかもこの方は「全能の父」であり、どんなこともお出来になるだけではなくて、どんなことを行う権利をもお持ちもお方であると。

2. 「創造主」：「天地の造り主」

また同時にこの方がすべての造り主、つまりあなたや私の造り主であるということは、当然その方は目的を持ってあなたを造ってくださった。その目的とはあなたがこの神様の栄光を現すということです。それが私の父なる神であり、この方によって造られた私が生かされている目的なのだ。

B. 「子なる神」についての10の説明

二つ目に私たちが見てきたのは子なる神、主イエス・キリストについてでした。この信条は私たちにイエス様についての10個の教えをしていました。

1. 「イエス・キリスト」「我は……イエス・キリストを信ず」

最初に、この方はイエス・キリスト、つまり約束の救世主、救い主だということを見てきました。人類に神が送ってくださった唯一の救い主です。

2. 「独り子」

しかもこの方は「独り子」とであると書かれていました。聖書が教える神は父なる神、子なる神、聖霊なる神がおられる唯一の神であられる。唯一まことの神とはこのような方であると聖書は我々に教えてくれています。私たちが納得するかしないかが問題ではありません。我々に理解できるかできないかの問題ではない。これが聖書が私たちに教えている、あなたをお造りになりすべてを治めておられる唯一まことの神です。この唯一まことの神は父なる神であり、子なる神であり、聖霊であると。この三人ではなくてひとりの神がおられるのです。

3. 「我らの主」「我らの主……を信ず」

またイエス様は我々の主であると教えます。絶対的な支配者、最高位の主人、神であられるお方です。だからすべての被造物がこの方に仕え、そのように生きています。そのように歩んでいます。イエス様が私たちの主人であるならば、当然要求されるのはこの方のみこころに従い続けていくことです。問題は我々ひとりひとりが、あなたがそのように生きていくかどうかということです。

4. 「主は聖霊によりてやどり、おとめマリヤより生まれ」：処女降誕

四つ目は、「主は聖霊によりてやどり、おとめマリヤより生まれ」た。この方の誕生についてでした。処女降誕という大変難しい教理ですが、罪のない神が人としてこの世にお生まれになるには、女性の胎を必要としたわけであって、神はマリヤを使ってこのように人としてお見えくださった。なぜこのような方法で、主が、神が私たちのところに来てくださったのか——。それはもう我々が知っているように、私たちの新たな罪を赦すためでした。罪のない者だけが罪の身代わりとなることができる。そこで神がマリヤの胎を通して人としてこの世に来てくださったのです。ですから彼は「インマヌエルと呼ばれる」（マタイ 1 : 23）、つまり「神は私たちとともにおられる」と。神ご自身が、創造主なる神が、三位一体の唯一まことの神が私たちのところに来て、我々とともに住んでくださった。それが私たちの神です。

5. 「ポンテオ・ピラトのもとに苦しみを受け」：歴史上の人物

5番目に私たちが見たのは、「ポンテオ・ピラトのもとに苦しみを受け」た、つまりイエスはポンテオ・ピラトという歴史上の人物によって裁かれ、架空の人物ではない、確かに歴史上の人物であったと教えています。

6. 「十字架につけられ」：身代わりとしてのいのちを犠牲にされた

6番目このお方は「十字架につけられ」たと。あなたの罪をその身に負って、あなたが受けるべきさばきを、神の怒りをすべてあなたのために飲み干してくださるために来てくださった。

私たちはそこまで見てきました。あと残っているのは四つをきょう私たちはご一緒に見ていきます。

7. 「死にて葬られ、陰府にくだり」：死なれた

7番目には、「死にて葬られ、陰府にくだり」と書かれています。イエス様が十字架で亡くなった後、彼の霊はどこに行ったのか、この信条が私たちに教えてくれるのは、主は「陰府」に行かれたと記されています。旧約聖書はこの部分のことを「シェオル」と呼び、ギリシャ語ではこれを「ハデス」と読みます。どちらも人が死んだ場合、最後のさばきを待つまで一時的に置かれるところです。

◎ 金持ちとラザロの話

そのことについて皆さんもよくご存じのルカ 16章のラザロと金持ちのところが私たちにハデスについて教えを与えてくれています。ルカ 16 : 19からラザロと金持ちの話が記されています。19節「ある金持ちがいた。いつも紫の衣や細布を着て、毎日ぜいたくに遊び暮らしていた。ところが、その門前にラザロという全身おできの貧乏人が寝ていて、金持ちの食卓から落ちる物で腹を満たしたいと思っていた。犬もやって来ては、彼のおできをなめていた。」と、それぞれの境遇が記されています。大変裕福な人間とそうでなかったラザロという人物です。この二人に共通していることがあります。22節を見ると、「さて、この貧乏人は死んで、御使いたちによってアブラハムのふところに連れて行かれた。金持ちも死んで葬られた。」と、ふたりに共通していたことは死を迎えるということでした。ふたりとも死んだのです。

死んでから一体どうなってしまうのだろうと、多くの人々は疑問を抱きます。この箇所は我々に教えてくれています。死んだ後、その存在が消滅するものではありません。存在がなくなってしまうのではない。死んだ後も意識を持って、意思を持ってちゃんと生き続けているのです。そのことがこの中に記されています。例えば23-24節「その金持ちは、ハデスで苦しみながら目を上げると、アブラハムが、はるかかなたに見えた。しかも、そのふところにラザロが見えた。彼は叫んで言った。『父アブラハムさま。私をあわれんでください。ラザロが指先を水に浸して私の舌を冷やすように、ラザロをよこしてください。私はこの炎の中で、苦しくてたまりません。』」、お気づきになったように、この金持ちは肉体的な死を迎えた後、ハデスに行くのですが、その場所にあってちゃんと物を感じています。彼が言った「この炎の中で」ということばからしてもハデスが炎の中であることがわかるし、その中で彼は「苦しくてたまりません」と言っています。少なくともハデスに行った金持ちの霊はちゃんと意識を持っていたということです。今の私たちと同じように熱さを感じ、苦しみを感じ、痛みを感じるのです。しかも意思がありました。今と同じようにちゃんと要求しています。人が死んだ後、このようになることを聖書は我々に教えてくれています。だからふたりに共通していたのは、ふたりとも死を迎えたことであり、死後存在が消えてなくなったのではないのです。ラザロもちゃんと「アブラハムのふところ」というところにいたのです。それをこの金持ちは見たのです。

① アブラハムのふところ

ふたりに共通していなかったことは、それぞれ異なった場所に行ったことです。今もお話したようにラザロの行ったところと金持ちが行ったところは全然違うところでした。22節に「御使いたちによってアブラハムのふところに連れて行かれた。」、23節「しかも、そのふところにラザロが見えた。」と書かれています。この「ふところ」ということばは人が座っている時にその胸の部分から太ももの部分を指します。ですから「ひざの上に」と説明する辞書もあります。また英語の訳を見ると、「自分のそばに」とか「横に」と訳している聖書もあります。また、この「ふところ」ということばは、大変名誉ある場所を指します。ヨハネ 13 : 23に記されている最後の晩餐の話に出てきます。イエス様とともに弟子

たちが食事をする時に、イエス様の右側にヨハネが座っています。彼はこんなふうには書いています。「弟子のひとり、イエスが愛しておられた者が、イエスの右側で席に着いていた。」と書いてあります。この「右側」というのがこの「ふところ」と同じことばが使われています。つまりこの「ふところ」というのはそのゲストの中で最も名誉ある場所でした。ですからそこからしても「アブラハムのふところ」というところは大変名誉ある場所なのです。

もう一つはヨハネ 1 : 18 にこう記されています。「いまだかつて神を見た者はいない。父のふところにおられるひとり子の神が、神を説き明かされたのである。」と書いてあります。「父のふところにおられるひとり子の神」、つまりイエス様のことです。イエス様が「父のふところにおられる」のだと。このことばは「親密さ」や「愛の結びつき」を意味するのです。ですから父なる神様と子なる神イエス様とはいかに親密であるのか、いかに深い愛で結ばれているのかと。そういう意味のあることばがここで使われています。ですから「アブラハムのふところ」に行ったというのは特別な祝福のところへと導かれたということです。なぜなら彼は罪が赦されていたからです。この「アブラハムのふところ」と言われているところは、罪が赦された義なる者たちが行った場所なのです。

② ハデス

ではこの金持ちはどうなだったかということ、23節「その金持ちは、ハデスで苦しみながら目を上げると」と書いてあります。この「苦しみながら」というのは現在形です。ですから継続してその苦しみを彼は味わっているのです。また24節「この炎の中で、苦しくてたまりません」とあります。この「苦しくてたまりません」という動詞も現在形を使っています。ですからこのハデスの「炎の中」に行った金持ちは、この「苦しみ」を継続して味わい続けていた。「苦しくて」たまらない状態が継続していることを教えてください。彼が行ったハデスは罪の赦しを拒んだ者たちが行くところでした。ですからおわかりになるように、罪の赦しをいただいている者たちとそうでない者たち、行くところは全く違うということです。

もう一つだけこのハデスの特徴を言うと、26節「そればかりでなく、私たちとおまえたちの間には、大きな淵があります。ここからそちらへ渡ろうとしても、渡れないし、そこからこちらへ越えて来ることができない」とあります。金持ちはラザロを私のところによこしてくれと言いました。その指先に冷たい水を浸して私の舌を癒してくれるようにリクエストするのですが、アブラハムはラザロが「アブラハムのふところ」からあなたのところに行くことはできないし、あなたも今その炎の中からアブラハムのところに来ることはできないと答えます。私たちが「アブラハムのふところ」、その祝福の場所に行ったら、そこにとどまり続けるのです。そこからどこかに行くこともないし、そしてもしあなたがこの炎の中のハデスに行ったら、あなたはそこからどこへも行けない。その状態が最後のさばきまで続くということです。

このハデスということばは、新約聖書の中にギリシャ語として10回出てきますが、しばしばこれを地獄と訳すことがあります。でもこの訳は正しくありません。なぜなら聖書の中で地獄を意味することばが別にあるからです。それはゲヘナということばです。ヒンノムの谷と言われて、それはエルサレムの西にあって、そこはいつもゴミが燃えているところから地獄を表すことばになったのです。聖書のどこにもイエス様が地獄に行かれたということを記している箇所はありません。私たちが同じようにイエス様は亡くなった後、亡くなった者たちが行くところに行かれたと。つまりこの信条の中で言っていることは、イエス様がどこへ行って何をしたのかというのではないのです。言いたいことはイエス・キリストが完全に死んだということです。これが強調されているところです。私たちがこの箇所を見る時に教えられるのは、イエス様はあの十字架で完全に息を引き取られた。仮死状態にあってその後目を覚ましたのではないのです。彼は100%死を迎えたということです。

8. 「三日目に死人の内よりよみがえり」

だから8番目にこう続きます。「三日目に死人の内よりよみがえり」とあります。死人の内からよみがえってきたのです。なぜなら完全に死んでいたからです。よみがえりの話がここに記されています。

1) クリスチャンの希望：永遠のいのち

クリスチャンであるあなたの希望は何ですかと質問したら、皆さんは何とお答えになりますか？恐らくほとんどの方が私の希望は永遠のいのちですとお答えになると思います。ちょうどヨハネ 11 : 25 で「わたしは、よみがえりです。いのちです。わたしを信じる者は、死んでも生きるのです。」と言われた。この希望を持って私たちはこの地上を歩んでいるはずで、いつか私たちは肉体的な死を経験するでしょう。でもそれが終わりではなくて、それはすばらしい祝福の始まりでもある。死んでも私は生きるのだという希望をいただいた者として我々はそれを楽しみながら今を生きているのです。感謝なことに今もそうです。我々はこの主によって迎えられて、この主とともに親しい交わりを持ち続けていくことができるし、我々が栄光のからだをもらって主にお会いした時に、この方の御顔を拝しながら、この方をほ

めたたえながら、礼拝をしながら永遠をともに過ごしていくのです。ちょうど今私たちがその片鱗を実際に経験しながら生きているのです。私たちは礼拝者、主をあがめる者として生まれ変わったのです。なぜかという、礼拝者として永遠を生きるからです。私たちは確かにイエス様の御顔を今拝してはいませんが、感謝なことにイエス・キリストによって救われた者として、神の子どもとしてこの方を愛しながら、この方をあがめながら生きる新しい人生が始まったのです。信仰者の皆さん、もう間もなくすれば我々はイエス様にお会いするのです。この希望を持って私たちはきょうを生きることができるのです。

2) その根拠：イエス・キリストの復活

確かに永遠のいのちが私の希望であると。そこで一つ考えてみたいのは、ではその根拠は何なのか？ということ。結局考えなければいけないのはそこです。この世の中にあつて、呼び方は違いますが、私は死んでも天国に行ける、そう思い込んでいる人はいっぱいいます。でも私たちが問うべき質問というのは、ではその根拠は何ですかということ。なぜあなたはきょう死んでも天国に行けると信じておられるのですかと。それが大切な質問です。私たちはいろいろなものを信じますが、本当にそれが真実なのかどうか、我々クリスチャンの希望の根拠は何なのか、なぜ私は死んでも間違いなく生きる、イエス様とともに永遠を生きるのだと確信を持って言えるのかということ、主イエス・キリストの復活なのです。ですからパウロはIコリント15：12-20で何度も繰り返してイエス・キリストの復活が事実であるということを教えようとしています。

(1) もし主がよみがえらなかつたら：

もしイエス様がよみがえらなかつたら、イエス様が、そのからだはまだエルサレムの墓の中にあるとしたら、次の五つのことが言えます。

① 我々はよみがえらない 13、16節

イエス様のからだはまだ墓にあるのだつたら、あなたも私も死んだ後絶対によみがえらないということです。イエス・キリストの御からだはまだ墓の中にあるとするならば、我々は死んだ後よみがえることは決してないということです。Iコリント15：13に「死者の復活がないのなら、キリストも復活されなかつたでしょう。」とあります。16節にも「もし、死者がよみがえらないのなら、キリストもよみがえらなかつたでしょう。」、だからイエス様がよみがえっていないとしたら我々も死んだ後よみがえることはなく、それで終わりだと。

② 我々の奉仕は空しい 14節

二つ目に言えるのは、あなたや私が主を愛して主のためになしているすべての奉仕は空しいということです。14節「キリストが復活されなかつたのなら、私たちの宣教は実質のないものになり、」、つまりあなたが一生懸命主を愛してなしているすべての奉仕は空しいと。もしイエス様が死からよみがえらなかつたとしたら全く意味がないと。

③ 我々は救われていない 14、17節

三つ目に言えるのはあなたも私も救われていないということです。14節に「あなたがたの信仰も実質のないものになるのです」とあります。17節に「そして、もしキリストがよみがえらなかつたのなら、あなたがたの信仰はむなしく、あなたがたは今なお、自分の罪の中にいるのです。」と。ですからイエス様がよみがえらなかつたとしたら、我々は罪赦された、永遠のいのちが与えられたと告白しているのですが、それはあなたに与えられていないことになるとパウロは言います。もしイエス様がよみがえらなかつたとしたら、あなたも私もよみがえることはないし、我々の主に対する奉仕は全部空しいし、そしてあなたも私も罪の赦しをいただいていない、救われていないのです。

④ 我々は神に対して虚偽の罪を犯した 15節

また4番目にイエス様の復活がもしなかつたとしたら、我々は神に対して虚偽の罪を犯したのです。神に対してうそをついたのだと言うのです。15節を見ると「それどころか、私たちは神について偽証をした者ということになります。なぜなら、もしもかりに、死者の復活はないとしたら、神はキリストをよみがえらせなかつたはずですが、私たちは神がキリストをよみがえらせた、と言って神に逆らう証言をしたからです。」、よみがえっていないのに、イエス様はよみがえつたのだとうそをついたことになると。

⑤ 我々は滅びるのを待つだけ 18節

そして最後5番目に、18節に「そうだったら、キリストにあつて眠った者たちは、滅んでしまった」と出てきますが、我々はこれまでの人々と同じように滅びを待つだけの者になります。

(2) イエス・キリストの復活の証拠

しかし、みことばは、イエス・キリストが敢然と肉体を持ってよみがえつてきたのだと教えてくれます。我々はその中の五つの証拠を見ていきます。

① 主ご自身のあかし ヨハネ2：19-20、21-22

一つ目は主ご自身のあかしです。イエス様がエルサレムにおられた時に、ヨハネ 2 : 19 でエルサレムの神殿を指して非常に不思議なことを言われました。これを「こわしてみなさい。わたしは、三日でそれを建てよう。」と言われました。その時にそれを聞いていたユダヤ人たちは「この人は何を言っているのだ」と思ったと思います。なぜならこの神殿を建てるのに 46 年間かかったのです。イエス様がこんなことを口にされた時に、「あなたはそれを三日で建てると言うのですか」とそこにいた多くの人々は同じように思ったでしょう。でもイエス様は、そこにあるすばらしい建物をこわしてみなさい、三日で私が復元してみせますと、そんな話をしていたわけではなかったのです。イエス様がそこで何をお話になっていたのか、聖書の箇所は我々に明らかにするのです。同じヨハネ 2 : 21 を見ると「しかし、イエスはご自分のからだの神殿のことを言われたのである。」とあります。つまり建物の話ではなく、ご自分のからだの話をされていたのです。

そこで 22 節に「それで、イエスが死人の中からよみがえられたとき、弟子たちは、イエスがこのように言われたことを思い起こして、聖書とイエスが言われたことばとを信じた。」と続きます。イエス様が十字架で亡くなった後、約束どおりその死から三日後によみがえってきた時に、イエス様はこの話をしていたのだと、弟子たちも人々もわかったのです。だから私たちが言えることは、イエス様が十字架で死んだ後、三日後によみがえると言っておられたということです。成り行き上そうなのではないのです。イエス様が言っておられたように、三日後に約束どおりその死からよみがえったのです。

② 主の弟子たちのあかし 使徒 2 : 22-24、21-22

二つ目の証拠はイエス様の弟子たちのあかしです。イエス様が死からよみがえって地上に 40 日間おられた。その間にイエス様は肉体を持ってよみがえったことを人々の前で明らかに示された。そしてイエス様は天に凱旋していく時に、天使たちがそのありさまを見ていた弟子たちに告げます。イエス様はあなた方が見ていたと同じありさまで帰って来るのだ。それからあなたがたは聖霊なる神様をいただくのだと伝えられた。その聖霊なる神をいただくことによって、あなたたちはエルサレムから始まって、地の果てにまでキリストの証人として出ていくのだと言われたのです。その話があつて 10 日後に、実際にその約束が成就するのです。イエスを信じる者たちの上に聖霊が下ったのです。使徒 2 章に出てくるペンテコステの出来事です。

その時にいろいろな現象を見るのです。いろいろな人々がはっきりとわかる言語、ことばで話したのです。自分たちのわかることばで話しているからみんな驚いたのです。その中にあってペテロが何が実際に起こっているのかを説明し、大切な神様のメッセージを群衆に伝えます。「イスラエルの人たち。このことばを聞いてください。神はナザレ人イエスによって、あなたがたの間で力あるわざと不思議としるしを行われました。それらのことによって、神はあなたがたに、この方のあかしをされたのです。これは、あなたがた自身をご承知のことです。」(22 節)、イエス様がいろいろなわざをなさったのをみんな知っているでしょう？と。23-24 節「あなたがたは、神の定めた計画と神の予知とによって引き渡されたこの方(イエス様)を、不法な者の手によって十字架につけて殺しました。しかし神は、この方を死の苦しみから解き放って、よみがえらせました。この方が死につながれていることなど、ありえないからです。」と。このようにペテロは人々の前で語るのです。十字架に架けられて亡くなったイエスはちゃんと約束どおりよみがえったと。32 節にはこう続きます。「神はこのイエスをよみがえらせました。私たちはみな、そのことの証人です。」と。彼らは見たのです。40 日の間、イエス様が復活なさってから実際に時間をともにした、食事をしたのです。イエス様の御からだに触れたのです。そして彼らはイエス様は確かに肉体を持ってよみがえったと確信を持ったのです。だから彼らはこのよみがえられたイエス・キリストのメッセージを語り続けていくのです。なぜなら彼らは実際にイエス・キリストにお会いしたからです。だから、「私たちはみな、そのことの証人」なのだ。人の話を聞いて、誰かが話していたことを聞いてそれを伝えているのではない。私たちは見たのだ、我々はこのイエス様の御からだに触れたのだ。これが弟子たちのメッセージになったのです。なぜなら彼らは復活の主を実際に自分たちの目で見たからです。

③ 主の敵たちのあかし マタイ 27 : 62-66、28 : 11-15

三つ目は、主の敵たちのあかしです。イエス様だけがイエス様ご自身がよみがえることを言ったのではない。弟子たちがそのよみがえりを見て語ったのだけではない。実はイエス様の敵たちもイエス様の復活のあかし人になったのです。

同じマタイ 27 章に、イエス様が十字架で亡くなった後、祭司長やパリサイ人たちがイエスをさばいたピラトのもとに集まって来るのです。おもしろいことを彼らはピラトに対して言います。マタイ 27 : 63 に「閣下。あの、人をだます男がまだ生きていたとき、『自分は三日の後によみがえる。』と言っていたのを思い出しました。」、このイエスの敵たち、サタンに仕える彼らもイエス様が何を言っておられたのかをちゃんと聞いて覚えていました。イエス様は彼らの前でもちゃんとそのことをお話になっておられたのです。64 節「ですから、三日目まで墓の番をするように命じてください。そうでないと、弟子たちが

来て、彼を盗み出して、『死人の中からよみがえった。』と民衆に言うかもしれません。そうすると、この惑わしのほうが、前のばあいより、もっとひどいことになります。」、お気づきになったでしょう？このイエスの敵たちは、サタンに仕える者たちはイエスがよみがえると言っていたことを確かに覚えていたのですが、イエスがよみがえるなどと決して思っていない。彼らはイエスの弟子たちがやって来てイエスの体を盗むに違いない、そしてよみがえったと言うに違いないと考えたのです。だからピラト閣下、大変申しわけありませんが、そんなことがないように命令をくださいと。そこで「ピラトは『番兵を出してやるから、行っただけの番をさせるがよい。』と彼らに言った。」と。これを聞いて彼らはうれしかったでしょうね。やった、なぜならローマの番兵が、精鋭たちが番をしてくれるのです。この連中を打ち負かすことなどできない。墓の周りをぐるっとローマの兵士たちが囲うのです、だれもイエスのからだを盗むことはできない。

もう一つは66節「そこで、彼らは行って、石に封印をし、番兵が墓の番をした。」、なぜ「石に封印」をしたのかというと、もしだれかがこのイエスの墓に立てかけてある大きな岩に押された封印を無視してその岩をどけたりしたら、あなたはローマに反旗を翻したことになるのだというメッセージです。ローマに逆らうことになる、それは何を意味するかわかるでしょうと。だから人々がやって来てそこにローマの封印がされているのを見たら、それに手を出せない。ローマを敵に回すことなどできないから。しかもその周りはぐるっとローマの武装した兵士たちが守っているのです。多分祭司長たちはみんな思ったでしょう。これでだれも盗み出すことはできない。三日待てばいいのです。そうしたらイエスが言っていたことは全部うそだということの証明になると。

何が起こったかは皆さんもうご存じですよ。イエス・キリストはその中から敢然とよみがえってきた。そこで彼らが何をするかというと、悲しいことに、28：11「女たちが行き着かないうちに」、イエス様がよみがえった後の話です。「もう、数人の番兵が都に来て、起こった事を全部、祭司長たちに報告した。そこで、祭司長たちは民の長老たちとともに集まって協議し、兵士たちに多額の金を与えて、こう言った。『「夜、私たちが眠っている間に、弟子たちがやって来て、イエスを盗んで行った。」と言うのだ。もし、このことが総督の耳にはいっても、私たちがうまく説得して、あなたがたには心配をかけないようにするから。』」そこで、彼らは金をもらって、指図されたとおりにした。それで、この話が広くユダヤ人の間に広まって今日に及んでいる。」と。悲しいですよ。イエス・キリストが言っておられたように、敢然とその死からよみがえって来たにもかかわらず、このイエスの敵たちはそれでも彼を信じようとはしない。かえってうそを流すのです。盗んでいったと。

イエス様の敵たちは何としてもイエスのからだをだれによっても盗まれないために、最善の策を講じるのです。もうこれ以上の策はないのです。だれもイエスのからだを盗むことはできないのです。恐らく彼らはこれで自分たちはもう最高のことをやったと、多分彼らはそれを喜んだでしょう。この出来事を思い出す時に、何を教えられるかということ、彼らが最善と確信した策謀も神の前ではいかに愚かなものであるかがここで明らかにされるのです。人間が知恵を働かせて、こうしたらベストだと思ったことが神の前では神の計画を妨げることなど全くできなかった。神は何トンもあると言われるその岩をどけることは平気だったし、イエス・キリストをよみがえらせることも全然問題なかった。おもしろいのはこの人々はイエス・キリストの復活を阻止しようとしたのでしょ？間違ってもイエス・キリストのからだをそこから盗まれないようにと彼らはありとあらゆる策を講じてこの復活を阻止しようとしたのです。でも神はこの彼らの悪たくみを活用して、ご自身の御子イエス・キリストの復活の証拠として用いられたのです。なぜなら私たちがこの出来事を通して学んでことは、確かにイエス・キリストはよみがえったということです。ローマの兵士たちもイエスを墓の中にとどめることができなかった。いかに人間が愚かであるのか、同時にいかに神が偉大なのかお気づきになりませんか？人間がどんなに神の計画に反することを計画して実行しようとも神の前にそれは空しいことです。神はみこころをなされるのです。少なくとも敵たちのあかしによってイエス様がよみがえったことがわかりました。

④ 主の天使のあかし マルコ16：2-6

また主の天使たちのあかしもあります。マルコ16章に、週の初めの朝、女たちが墓にやって来ました。そうすると、その大きな岩が既にサイドに転がされていたと。そして彼らが墓の中に入ったところ、そこに天使がいました。ここには「真白な長い衣をまとった青年が右側にすわって」いたと書いてあります。彼女たちはそれを見て驚くのです。そして天使は「驚いてはいけません。あなたがたは、十字架につけられたナザレ人イエスを捜しているのでしょうか。あの方はよみがえられました。ここにはおられません。」と告げます。このことばが今イエス様の墓とされる場所の収められていた木戸に書かれています。「彼はここにはいない、よみがえられた」と。天使たちがイエス様はよみがえったのだと告げたのです。

⑤ 歴史のあかし マルコ16：9、Iペテロ1：3

そして5番目に歴史のあかしです。イエス様が本当によみがえったということを証明するのは歴史で

す。イエス様がよみがえったのは週の初めの日曜日でした。それまでユダヤ人たちは土曜日に礼拝を持っていました。ところがその後ユダヤ人たちは週の初めの日、つまり日曜日に礼拝を持つようになったのです。使徒20：7にも「週の初めの日に、私たちはパンを裂くために集まった。」とあります。土曜日を礼拝の日として守っていた彼らが日曜日に礼拝するようになったのです。何があったのか——。キリストの復活なのです。イエス・キリストの復活が彼らの礼拝をも変えたのです。週の初めの日に礼拝するようになったという事実が、確かにイエス・キリストは聖書が記しているとおりに週の初めにその死からよみがえって来られたことの証拠です。

この五つの証拠がイエス・キリストは敢然とその死からよみがえって来たことを我々に教えてくれるのです。ということは、あなたも私も死んだ後よみがえるということです。この救いにあずかっている私たちは、あのラザロがそうであったように神様は私たちを祝福の場所へと導いてくださる。神のもとへと私たちを召してくださるのです。

◎ 初穂

イエス・キリストの復活が、我々の希望の根拠であると皆さんにお話ししました。Iコリント15：20にパウロはこんなことを記しています。「しかし、今やキリストは、眠った者の初穂として死者の中からよみがえられました。」、この「初穂」ということばに注目してください。主はイスラエルに対して大麦を収穫する前にその一部を取りなさいと言われました。その取った一部を祭司のところに持って来るのです。それはレビ記23：10にこうあります。「イスラエル人に告げて言え。わたしがあなたがたに与えようとしている地に、あなたがたがはいる、収穫を刈り入れるときは、収穫の初穂の束を祭司のところに持って来る。」と。収穫を刈り入れる時、彼らはまず「収穫の初穂の束を祭司のところに」持って行くのです。ではもらった祭司はどうするかというと、11節「祭司は、あなたがたが受け入れられるために、その束を主に向かって揺り動かす。」と。光景が描けますか？畑が収穫の時を迎えたら彼はその一部を取って祭司のところに持って行くのです。そして祭司はその束を主に向かって揺り動かすのです。それは主への奉納の捧げものとして捧げられたのです。これは主のものとして神の前に捧げられたのです。その後、農夫たちは自分たちの畑の収穫に当たるのです。

パウロは「キリストは、眠った者の初穂として死者の中から」よみがえったと教えました。「初穂として」最初に捧げた後で収穫がなされると。イエス様は「眠った者の初穂」、つまり死んだ者たちの初穂としてよみがえって来られたと。この後は収穫が続くのです。つまりイエス様がよみがえったように、イエス・キリストを信じてこの救いにあずかった者たちが、よみがえってこの祝福の中に招かれて行くのです。もちろん神に逆らい続けた者たちはよみがえって既に見てきたようにそのさばきに服していくのです。ですから、パウロがこの20節のところで私たちに教えたいことは、イエス・キリストの復活というのは、この後に彼を信じる者たちが、そしてそうでない者たちの復活が続くということです。彼は「初穂」なのだと、この後に収穫が待っているのだと。そのことをもって私たちによみがえりが必ず起こることを明らかにするのです。

だから私たちクリスチャンというのは、すばらしい神様からいただいた希望を持って生きる者とされたのです。そして主が主であられることが私たちにとっての確信です。なぜならこの方は絶対に偽りを言うことのないお方、常に真実だけをお語りになる方です。この方が言われたのは常に真実なのです。同時にこの方は必ず約束を守られるのです。その約束は永遠に変わらないのです。イエスを信じる者は永遠に救われるのです。その約束は変わらないのです。神が言われたことは変わらないのです。しかもこの方は不可能なことが何一つないお方です。つまりどんなことでもお出来になるお方です。あなたや私をその死から敢然とよみがえらせ、約束されたように私たちをこの祝福の中に招き入れることができるのです。これが私たちの神なのです。きょうがこの地上における最後の日であったとしても、感謝なことに私たちはこの日この我々の最も愛する主にお会いすることができるのです。我々はこの方の御顔を拝してこの方に心からの礼拝を捧げることができるのです。そして感謝なことに、私たちがこの方にお会いするならば、我々は私たちを苦しめ続けて来た罪から完全に解放されるのです。ハレルヤじゃありません？これが我々信仰者に与えられた希望なのです。イエス・キリストの復活がそれを可能にしたのです。ただ何となく私たちがことばでイエス・キリストがよみがえったというだけではなく、このイエス・キリストのよみがえりというのはこんな私たちにこんなすばらしい希望をもたらしてくれたのです。だから私たちはこのよみがえりの主をほめたたえ続けるのです。我々のメッセージはイエス・キリストは十字架で死なれただけではなく、約束どおりその三日後によみがえって来たまことの主なのです。そのことを皆さん、感謝されてます？そのことを喜んでおられます？あなたの主は今も生きておられる。

9. 天にのぼり、全能の父なる神の右に座したまえり。

9番目に出て来るのは、「天にのぼり、全能の父なる神の右に座したまえり」と。これまで私たちは

イエス様がどういう方なのか、どんなことをなさったのか八つ見て来ました。これは全部過去形なのです。イエス様が何をなさったのか、我々は既にもう過去の出来事として見て来ました。ところがこの9番目だけは「天にのぼり、全能の父なる神の右に座したまえり」と現在形を使っています。なぜならこれを主が今もなしておられるからです。イエス様は確かに天にのぼられ、その後、天にある神の右の座に着座なさったのです。「全能の父なる神の右に座したまえり」と。この右の座というのは最高の地位や名誉、権威の場所を指します。イエス様がそこに着座なさったというのはイエス・キリストがそれにふさわしいお方だからです。イエス様は最高の地位を、最高の名誉を、そして最高の権威を受けるにふさわしいお方です。同時に、イエス様がこの地上にお見えになったそのあがないのみわぎをイエス様は完了したからです。働きが終わってなかったら、まだやることがあるから座れないのです。座られたというのはイエス様がなそうとされていたすべての働きが終わったのです。イエス様のあがないのみわぎに欠けたところはないのです。イエス様はあなたや私のために完全な救いを備えてくれたのです。すばらしいと思いませんか？あなたや私も完全に救われるのです。99%救われてあと1%頑張りなさいではないのです。100%神は救いを備えてくださり、その救いを私たちに与えてくださったのです。なぜならイエス様はこの地上でのすべての働きを終えられて、天に凱旋されて父なる神の右の座に着座されたのです。終わったのです。イエス様のすべての救いのみわぎが完成したのです。

ではそこにあってイエス様は何をされているのかというと、今もあなたのために働いてくださっているのです。あなたのためにとりなしをするのです。あなたのために祈り続けてくださっている。それだけではない。サタンは神の前であなたのことを訴え続けていると言います。「こんな罪を犯している、あんなことをやってる」、「こんな思いを持っている」と。イエス様はその時にあなたに代わってあなたのことを弁護してくれていると。どこまで私たちは恵まれているのでしょうか？私たちが何かしたから救いをいただいたのではない。神が一方的に救いを下さった。そしてそれですべて神の働きが終わったのではなくて、その神は私たちを、我々の弱さ、愚かさをわかっておられるから我々のために祈り続けてくださっている。我々に助けが必要なことをおわかりだから、私たちに助け主である聖霊を下さった。しかも我々が罪を犯す時に父なる神の前で私たちの弁護をしてくれている、これがイエス様なのです。

10. かしこよりきたりて生ける者と死にたる者とを審きたまわん。

そして最後に10番目です。「かしこよりきたりて生ける者と死にたる者とを審きたまわん。」、これは現在形ではなく未来形で、再臨の確実性を話すのです。二つの再臨があります。一つは神の子どもたち、我々クリスチャンをを迎えに来てくださる再臨です。もう一つはこの世をさばくために来られる再臨です。イエス様は地上に帰って来られ、約束されていたさばきを下されるのです。使徒10:42に「イエスは私たちに命じて」、イエス様が言っているのです。「このイエスこそ(ご自分のことです)生きている者と死んだ者とのさばき主として、神によって定められた方であることを人々に宣傳伝え、そのあかしをするように、言われた」のだと。イエス様がこのメッセージを私たちに下さった。このイエス・キリストこそがさばき主だというメッセージです。またパウロは使徒17:31で「なぜなら、神は、お立てになったひとりの人により義をもってこの世界をさばくため、日を決めておられるからです。そして、その方を死者の中からよみがえらせることによって、このことの確証をすべての人にお与えになったのです。」、神様はもうさばきの日を決めておられることが事実であることを主イエス・キリストを死からよみがえらせることによって証明された。

ではなぜ神様はさばくのか——。神様はすべてにおいてきよい正しい方だからです。この方はどんな罪であってもそれを放置することはできないのです。これまで歴史が証明したのです。神は罪に対してそれにふさわしいさばきを下して来られた。そして今も必ずさばきが来るとその警告はあるのです。しかし、そのさばきに服するべき存在は私でありあなたです。けれども、神はさばきではなく救いを下さったのです。しかも今も多くの人々に忍耐を持って救いのチャンスを与えてくださっている。ひとりでも多くの者が悔い改めに至るように待っておられる。そしてその人たちにこの救いのメッセージを、すばらしい神様のメッセージを伝えるすばらしい務めをあなたや私に下さった。

きょう我々は、あなたの神様であるイエス様が一体どのようなお方であるかを見てきました。この信条の中に記されているのはあなたの神の話です。この信条の中に記されているのは私の神の話です。この方によって救われたのです。このような神様によって私たちは愛されたのです。このような神にあって私たちは生かされているのです。このような神によって私たちは用いていただけるのです。特権だと思いませんか？そのことを覚えて我々は生きるのです。あなたは一体どんな神様を信じているのですか？あなたの信じたイエス様ってどんな方なのですか？この信条は私たちに教えてくれたのです。これが私の神だ、これが私の信じるイエス様なのです。どうかこのみことばがあなたの心にしっかりと刻まれて、私の信じたイエス様ってこんなに偉大な方だと、その方を心から誇る者として、心から人々に伝える者として与えたこの一週間もしっかりとそのように歩いていきましょう。